

戦時抵抗と政治犯の釈放

——岩田英一氏に聞く（2）



吉田 健二

はじめに

- 1 生い立ちと経歴
- 2 私の戦争期——入党と全協のオルグ（以上、第653号）
- 3 私の戦時抵抗——電気溶接学校の経営（本号）
- 4 政治犯の釈放

3 私の戦時抵抗——電気溶接学校の経営

三二テーゼ

岩田 1932（昭和7）年5月、陸・海軍青年将校らのクーデター5・15事件が起きました。犬養毅首相が暗殺され、政友会や、財閥中枢の三菱銀行が襲撃された。私は言葉では表せない陰鬱と焦燥——戦争とファシズムの時代の到来を予感した。

5・15事件から2か月ほどたつ1932年7月10日、日本共産党が「赤旗（セッキ）」号外で三二テーゼ、すなわち「日本における情勢と日本共産党に関するテーゼ」を発表しました。

三二テーゼは、日本共産党代表としてロシアに亡命中の片山潜や、中国に亡命中の野坂参三も参加して、モスクワのコミンテルン本部において決定をみた日本共産党の綱領的文書です。テーゼは、日本の支配体制が絶対主義的な天皇制体制であるとし、天皇制自体、財閥と地主制を基盤とすると規定していた。また日本革命についてもまずは民主主義革命により天皇制を打

倒し、次に労農階級を主体とするプロレタリア革命をめざす二段階の革命論に立っていた。

全協の「君主制廃止」綱領

岩田 二段階革命——私はこの規定に異論はない。天皇制が半封建的で絶対性を有するものであれば、その清算は日本革命の戦略課題となります。

問題は別のところにあった。5・15事件につづき、1936年にも軍部のクーデター2・26事件が起きました。これにより軍部が政治舞台に台頭し、中国との関係でも全面戦争に拡大する情勢にあった。事実2・26事件の翌年に日中戦争が起きました。

1931、2年は戦争とファシズムの時代の入り口であり、だからこそ無産階級は結束を強めて戦線を強固にする必要があった。日本共産党や全協の運動も、この点を意識して日常闘争や連帯の輪を強めるべきだった。

ところが日本共産党は1932年8月に、全協に対して三二テーゼに沿って君主制廃止＝天皇制の打倒を綱領として掲げるよう求めてきた。闘争の主目標を君主制の廃止におけ、と言ってきたのです。

君主制の廃止——これは当然の要求です。けれども私はこのスローガンを直接に労働組合や大衆団体に持ち込むことに反対だった。だって無産陣営にあっては連帯と統一の輪が狭まり、人民戦線が結成できなくなりますもの。

全協の中央委員会は、共産党の要求をどう扱うか悩んだ。君主制廃止を採択するよう指導したのは党の東京市委員会です。私は全協のオルグです。だから経緯はそれなりに知っているが相当もめました。

—— 綱領は微妙な差で採択されたそうですね。

岩田 そうです。9対8だった。1票差です。これにより全協は先鋭化し、あるいは街頭化し、労働争議においても「君主制打倒！」を大書したポスターを工場に貼り、周辺一帯にビラを撒いた。

全協が君主制の廃止を綱領に掲げたことはむしろ組織の衰滅を速めたと思いますね。全協は活動領域を狭め、官憲に徹底的に警戒された。

活動の拠点を名古屋に移す

岩田 1931年9月の東京・浅草六区における全協・一般使用人組合の反戦デモや、翌年8月までの一連の映画館争議で、警視庁は、私や同じオルグだった富岡隆を争議の首謀者として疑い監視を強めた。富岡は不用意な行動で検挙・起訴され、「上申書」を書いて活動から身を引いた。

他方で、東京憲兵隊は私が反戦ビラを作成し浅草一帯に撒いたことを重視した。私は渋谷憲兵分隊の福島大尉の監視下に置かれ、見張られ

た。私はきわめて危うい事態になったので、1933年1月に活動の拠点を名古屋に移した。

—— なぜ名古屋市に？

岩田 伯父が名古屋におりました。父から生前、困ったら伯父を頼るよう言われていました。私は伯父の紹介で、ひとまず中区の高木鉄工所に就職した。当時、高木鉄工所は中堅の企業でしたが、金属溶接に先端の電気溶接を採用していた。

私は早実時代に理工系の科目を多く選択し、電気の応用技術にも興味があった。私は工場で先輩の技師から電気溶接の実地指導を受け、また溶接技術の雑誌や専門書を読み理解を深めた。

やはり独学では理解できないことがあるのですね。当時、名専（名古屋工業専門学校＝現在は名古屋工業大学）に小寺信次という電気工学の教授がいました。私は先生の親戚筋にあたる早実の先輩の紹介を得て、研究室に出入りすることが認められた。先生とはこれが縁で、私が東京で電気溶接学校を設立するさい初代の校長になっていただきました。

三菱航空機の争議に関与

—— 岩田さんは、全協のオルグを辞められたのですね。

岩田 それがうやむやなのです。1933（昭和8）年12月、宮本顕治のリンチ殺人事件＝スパイ査問事件があり、これがきっかけで日本共産党の指導部が壊滅した。東京市委員会から私に連絡がこなくなった。

名古屋におけるオルグ活動の一例を紹介します。三菱財閥の一つに三菱航空機という会社がありました。三菱航空機はのちに三菱造船と合併して現在の三菱重工業になります。

三菱航空機は、海軍の主力艦載機・ゼロ戦＝零式艦上戦闘機を製造した会社として知られて

います。名古屋製作所が主力工場で、愛知県のみならず、中部地方における最大の工場でした。

—— トヨタ自動車では？

岩田 いや、トヨタ自動車は現在は世界でビック3ですけれども、1933年当時はまだ創業していない。

1933年8月、この三菱航空機名古屋製作所で争議が起きました。発端は、工場に臨時工を一手に派遣していた大西組が、事前予告や解雇手当も支払わないで200人余の臨時工を解雇したことにありました。

被解雇者の臨時工に全協の組合員が15、6人ほどいて、どう対処すべきか私に相談が持ち込まれました。私はなお残っていた名古屋の共産党組織とも連絡をとり、工場側に対してあくまでも雇用関係の継続を求め、また解雇を受け入れた臨時工に対しては手当や帰郷費などの支給を要求するよう指導した。

当初、会社はこれを拒否した。愛知県の全協は次の作戦を立てました。1つは三菱航空機不当犠牲反対同盟を結成して、他の工場労働者や市民にも参加を求め、名古屋のみならず、東京・丸の内の三菱財閥の企業が集中している赤煉瓦ビル街にも連日ピラを撒いてその不当さを訴えました。

もう1つは、解雇を免れた名古屋製作所の臨時工や本工に連帯のストライキを実施するよう指導した。彼らは実際にサボタージュを実施した。

争議においてすばやく動いたのは、むしろ愛知県警察部工場課など内務省や商工省の出先機関でした。特高課というより、工場監督機関が事実関係の調査を始めた。事態は私らの思惑通りに進んだ。

私らの戦術は、会社側に立つ総同盟系や右翼系組合の妨害もありましたけれども、みごとに

成功しました。日本労働運動史上、犠牲者を出さずに、穏やかで前向きな形で臨時工の問題を解決した例はそうないと思いますね。

—— どういう点で？

岩田 会社側は解雇手当の支給を認め、これを請負会社の太西組でなく名古屋製作所が払いました。これは、臨時工の採用や解雇が最終的に会社側にあることを認めたことを意味しますね。

また会社側は、旧来からつづく日雇請負制を廃止することを表明した。解雇されなかった、太西組を通じて雇用された臨時工に対しても、会社は本工化する旨を約束した。

このことの意味するものは何か——要するに先鋭な街頭闘争や警察・工場側と力をもって対峙する戦術より、行動の幅を広げて、他産業の労働者や市民と連帯する闘争の重要さを示しているのではないだろうか。

全協のオルグを辞任

岩田 私は財閥企業、しかも日本の軍需産業の中核に位置する三菱航空機名古屋製作所の争議に勝って、高揚する気分を抑えられなかった。

私らは第二弾として、1934（昭和9）年2月、愛知県の三大企業——愛知時計電機、三菱航空機名古屋製作所、日本車輛製造の労働者を中心とする大規模な反戦ストを計画した。

この計画は前年12月に企画され、実行主体として3社に働く全協の組合員を中心に党員、共青（日本共産青年同盟）、シンパなど140余名を組織してメンバーの任務や配置まで決めていた。

ところが実施寸前に計画が察知された。たぶん愛知県警察部が先の三菱航空機争議の摘発に失敗して恥をかいたため、特高課あげて動静を探っていたのだろう。市内のアジト3か所が急

襲され、中心メンバーの大半が検挙された。

—— 岩田さんは？

岩田 私は検挙をまぬかれた。刑事が会社にやって来たが、私は現場に出ている仲間からの知らせで逃げ切った。愛知県の全協運動はこの「二月事件」をもってピリオドを打ちました。

禍が重なりました。この「二月事件」の最中に、警視庁が1933年12月に宮本顕治らが起こしたリンチ殺人事件＝スパイ査問事件の全容を発表し、新聞がこれを号外などでセンセーショナルに報じた。

スパイ査問事件とは、共産党に対する相次ぐ弾圧の裏に、もしかしたら党中央にスパイが潜り込み、大泉兼蔵だけでなく、小畑達夫もスパイじゃないかと疑って査問し、査問中に小畑が死んだ事件です。

大泉兼蔵は野呂栄太郎が信頼を寄せていた人物だったらしい。私は小畑達夫もスパイだったという報道や、宮本顕治らの査問で死者が出たという報道に衝撃を受けた。

私は絶望し、冷静でいられなくなった。私は高木鉄工所を辞し、東京に戻って中田惣寿に相談した。中田先輩は「現下の状況はまことに厳しい。待機するか、他に活路を模索すべきだろう」と助言してくれた。私は全協のオルグ、すなわち非合法活動にピリオドを打つことにした。

中田さんは労働農民党の大先輩で、1921（大正10）年に神戸で起きた川崎・三菱両造船所の争議を指導された経歴をもつ。彼は1927（昭和2）年9月、普選に先立つ東京府会議員選挙に労働農民党から立って当選した。私は中田さんの選挙活動を責任者として手伝い、彼とはそれ以来の付き合いでした。

戦時抵抗を構想

岩田 日本共産党が壊滅し、全協も消滅した

もとで、私は時代にどう向き合うべきか考えた。満州事変以降、急ピッチで国家総動員体制の構築がめざされた。他方ヨーロッパに目を向けるとナチス・ドイツが台頭し、これが第2次世界大戦へ発展する懸念があった。私は内外の動向を分析した結果、中田惣寿の助言もあり、待機主義をとることにした。

理由は1933、4年の時点で左翼陣営が孤立を深め、軍部主導の独裁政治と対峙する勢力あるいは抵抗主体などもはや存在しなかったからです。彼我の力関係で絶大な差があり、勝負は決着したも同然だった。

三菱航空機名古屋製作所の争議の直前、1933年6月に、創立期の日本共産党の委員長だった佐野学や、幹部の鍋山貞親が獄中から転向を声明してわれわれに衝撃を与えた。宮本顕治のスパイ査問事件が起きたのは、この佐野・鍋山の転向声明から6か月後のことです。これ以降、左翼の転向が相次いだ。

—— 「転向時代」の到来ですね。

岩田 そうです。だからこそ、われわれはヨーロッパ情勢や日本軍部の動向、また左翼陣営の衰滅を含む新しい事態を考察してこれに対応する必要があった。当時の労働歌に「弾圧の砲火を越えて、我ら行く」というセリフがあった。けれども争議激発や英雄主義に走り、あくまでも敵と対峙して燃え尽きるまで激闘すればよいというものではない。

私は向後10年、将来における日本を展望・構想しつつ待機することに決めた。戦争はいずれ日本の敗北をもって終結し、必ずやわれわれの手で新生日本を建設する時代が到来する見通しを立てた。

—— その根拠は？

岩田 近代における暗黒・独裁政治を顧みて、それが20年あるいは世紀単位でつづいたことなど例がないのです。18世紀末に、フラ

ンス革命に驚愕したオーストリアのメッテルニッヒら神聖同盟の暗黒政治も10年です。19世紀後半、ドイツの宰相ビスマルクの社会民主党に対する弾圧も12年だった。

20世紀初頭、1905年にロシアで革命が起きましたね。この第1次ロシア革命に恐怖して荒れ狂ったツァーの弾圧政治も12年余にすぎない。

だから劣勢にあった私らは、むやみに権力と対峙・激突するのではなく、連帯性を重視し、むしろ左翼人士を温存し、戦争が終結したもとにおける新生日本を担う闘争主体を準備することに重点をおくべきだろうと考えた。甘い考えだろうか。

電気溶接学校の設立

岩田 1934（昭和9）年6月、私は、弟が経営していた杉並区馬橋のマーケットの一角130坪に電気溶接学校を設立した。設立時の名称は東京電気溶接教習所です。

私が電気溶接学校を設立したのは、満州事変以降、情勢が一変し、合法舞台でしか活動の余地がなくなったからです。

この事態にわれわれは新しい形態で、進歩性や普遍性、あるいは戦争が終結したのちにおける新時代を準備する構想をもって対応する必要がありました。私の場合、これが電気溶接学校の設立だった。

私が、ガス溶接でなく電気溶接にこだわったのは、名古屋時代における高木鉄工所の実地経験からです。電気溶接は作業効率——熱量調整の容易さ、鉄の熔融率を30パーセントも節約でき、ポンペなど持ち運びしないですむこと、溶接に伴う品質の損傷も少ないなど先端の技術だったからです。

設立にさいして弟の協力を得ました。校舎の建築費が2,000円と少し、これに器材、材料費、

配線工事、事務・什器費が5～600円、人件費などをあわせて設立費用は1万円を少し超えました。

校長は小寺信次先生です。先生がちょうど名専を退官され、東京に戻って来られたのでお願いしました。

設立に際して東京府に提出した書類の控えが残っています。設立の名義人は弟で、私は校務主任という肩書になっています。教員として東京帝大の仲威雄、木原博、鯉淵正夫、小野竹之助、それに中川先生といった方々が名をつらねています。

——（原）日本における金属工学や溶接技術の発展をけん引した方々です。錚々たるメンバーですね。

岩田 どなたも30歳前後で新進の研究者でした。木原先生は造船溶接のパイオニアで、30歳代で船舶工学科の教授になられ、のち工学部長になりました。

仲先生は木原先生の先輩で、東京帝大に初めて設置された溶接工学の講座を担当され、鉄筋溶接の第一人者でした。仲先生も東大の工学部長を務められた。鯉淵先生はニッケル鋼やステンレス鋼の溶接が専門でした。

電気溶接学校のカリキュラム

——（原）カリキュラムはどうなっていましたか。

岩田 まず、養成期間は3か月単位です。この期間に、溶接一般及び電気溶接に関する基礎理論と実習を収め、修了すれば電気溶接工3級の認定書を発行しました。

なお私の学校では科目ごとに試験があり、合格点にたっしななければ単位は認定しない。実習もそうです。だから修了者はその実力が認められ、希望する大企業に容易に就職できた。

履修コースは午前、午後、夜間の3部に分け

ました。設立時は各コース定員30名、1回の授業は4時間です。だから朝8時半から夜9時半までフル回転で、事務員も大変だったと思う。授業料は実習費別で30円です。

のちに学校は海軍工廠に推奨され、中島飛行機、東芝、明電舎など民間の軍需工場からも委託を受けて研修コースを設けた。これは定員とは別枠です。定員は日中戦争の前年1936年から入学希望者が殺到し、事実上あつてないようなものでした。

——（原）実習指導は仲先生、木原先生もなさったのですか。

岩田 両先生は、電気工学や溶接工学に関する基礎理論とその応用に関する講義のみです。実習はもっぱら呉海軍工廠や、川崎造船所、横須賀海軍工廠、横浜船渠などの退職者で、電気溶接技術の資格1級をもつ退職者を採用しました。技術の練磨を積んだベテランであるほか、給与も少なくてすむ。

戦前の技能工養成システム

——（原）当時、溶接の技能取得に国の認証は無かったのですか。

岩田 ええ。日本溶接協会も検定していない。これは機械工や旋盤工と同じです。溶接に関する資格認証は、当時は陸海軍工廠や大企業が独自に基準を定めていて、てんでばらばらだった。

戦前における技能工養成は、事業所内の養成が基本で、国が認定・認証することはなかった。当然、技能工のレベルも事業所ごとにばらつきがあった。だから理論と技術・実習のカリキュラムを踏まえて認定する私の学校の修了生は、技能評価において客観性があり、かつレベルが高く、就職は引っ張りだこでした。

——（原）カリキュラムはどなたが作成したのですか。

岩田 小寺校長と仲先生です。仲先生の提案で、学業終了時における電気溶接工としての技能レベルを海軍工廠が定めていた3級を基準としました。海軍工廠では溶接工の技能を3段階に分け、3級は溶接技術に関する基礎理論の修得と30時間程度の実習を課していました。

——（原）岩田さんの溶接学校が海軍工廠の養成システムを参考にされたのは、どのような理由からですか。

岩田 海軍が日本において最も早く電気溶接技術を採用し、また養成システムを策定していたからです。原先生は木原博先生のお弟子さんだそうです。1930（昭和5）年に竣工した海軍の駆逐艦「夕霧」は、アーク溶接＝電気溶接の技術を用いて建造した最初の軍艦でした。

——（原）そうです。

岩田 海軍は「夕霧」の建造に溶接学者、とくに電気溶接関係の学者に協力を求めたそうです。木原先生から聞きました。「夕霧」以来、海軍における軍艦の建造はガス溶接でなく、電気溶接が主流となりました。

とにかく日本においては、海軍工廠が先駆けて電気溶接技術に注目してこれを採用しました。私の学校の場合、基礎理論の授業は東京帝大工学部の先生に、実習は熟練技師の退職者にお願いしました。この「庶務簿」で実習教員数を調べましたら、29名中21名が海軍工廠出身の技師でした。

電気溶接学校を代々木に移転

岩田 東京帝大の工学部に籍を置く新進の学生の授業や、最先端かついねいな実習が評判となって入学者が殺到しました。学校案内や、新聞広告において「軍需新技術、電気溶接技術をもって大工場へ！」「国防・産業技術の刷新——電気溶接技術！」というキャッチフレーズも効いたと思う。

開校時は、正直に言ってどのコースも入学者が定員未満だった。一番多い午前のコースで15人、夜間コースでは6人にすぎない。ところが翌年1935年の秋学期から状況が一変し、入学者が一挙に定員の3～4倍になった。もう、ほんとうに突然の出来事だった。

私は対応策を思案中、省電＝JR代々木駅すぐ近くの映画館が売りに出されるという情報を得た。この情報は、私が1931年9月、東京・浅草六区の映画館争議を指導したさい知り合った松竹の声優が知らせてくれた。私は即時に買おうと決めた。

先方が提示し金額は、土地500坪と30坪の飛び地、建物とを合わせて5万3,000円です。先方は手形決済なんかで売却を急いでいた。私は3万円なら今すぐに現金で買うと言った。

—— かなりの値引きですね。

岩田 まあ。先方はいくらなんでもとぶつぶつ言いながら承諾した。私はこの映画館を改築して2階建てにし、また事務室、教室3つ、実習室、講堂、器材倉庫などを設置した。

学校は1936年4月に、杉並区馬橋から渋谷区内の現在の日本共産党本部の敷地に移転しました。日中戦争勃発の前年のことです。

この移転を機に、学校名を東京高等電気溶接学校に変更した。この電気溶接学校の土地と建物は、後にも述べますが1945年10月6日に徳田球一を通じて日本共産党に寄贈しました。

電気溶接学校は代々木への移転を機に、定員を各コース40人に、翌年に60人に増やしたが、定員などあってないようなものだった。受付ができないほど入学希望者が押しかけました。

官民あげて戦力増強が叫ばれていた時代です。技能工の養成は喫緊の国策課題となっていて、これが1939年3月、国家総動員法第22条にもとづく工場事業場技能者養成令として公布された。

技能者養成令は、国が、一定規模の工場事業場に養成を義務づけ、機械工や旋盤工のほか溶接工も対象となった。溶接技術の優劣が軍事力の優劣に、いや日中一太平洋戦争の勝敗に直結すると考えられたからです。けれども企業が自前で技能工を養成するのに限界がありました。だから私の学校が脚光を浴びたのです。

—— 学校経営者としてはうれしいですね。

岩田 おかげで経営は設立2年目から軌道に乗り、日中一太平洋戦争期における軍需ブームのなかで思いのほか蓄財することができた。日本共産党もこの恩恵にあずかった。だって共産党は私の電気溶接学校を無償で手に入れたもの。

私が早実時代に夢みた実業家としては大成しなかった。けれどもオルグ活動中に修得した電気溶接技術をもって学校経営に成功し、蓄財し、また造船業や機械工業など戦後において花開く日本の科学・技術発展の人的基盤形成の一端を担いました。

私は現在85歳、まもなく86歳になります。これは強がりや自慢話として受けとめないでください。私は自らの人生を顧みて、戦時中における活動はそれなりに、いや大いに意義があったと思っていますのです。

相次ぐ視察

岩田 私の電気溶接学校は各界から注目されました。商工省機械局、軍需省産業機械局、厚生省と文部省の職業・技術教育の部署の局長、また中島飛行機、東芝、明電舎などの技師も視察に来ました。

1935（昭和10）年、東京府が品川区鮫洲町に機械工養成所を設立します。これは日本で初めて設立された公立の機械工養成所で、所長は清家正という人でした。清家さんは在任中5、6回、養成所の教官を引率して視察に来まし

た。

——（原）清家先生は私が専攻する機械設計・製図の第一人者です。東京府機械工養成所はのちに厚生省に移管され、機械技術員養成所となります。東京都立大学の工学部はこの養成所を母体に設立されました。

ちなみに建築家で、東京工業大学や東京芸術大学の教授をされた清家清さんは、清家正先生の息子さんです。最近テレビでよく顔を見る慶應義塾大教授の経済学者・清家篤さんは清家清先生の息子で、正先生の孫にあたります。

—— 知りませんでした。

岩田 清家正先生は誠実で、礼節の方でした。事前に視察の目的、人数、重点的に尋ねたい事項を書面にて申し出ていました。視察も学術的でした。初めての視察のときは時間をオーバーし、終わったのが正午近くだった。私は事務員に慌ただしく昼食の手配を指示したが、先生はこれを毅然と断られた。

また清家先生からは視察が終わって2、3日して、まことに丁寧な礼状が届きました。私の学校を視察して礼状をくださったのは先生だけです。

陸軍や海軍の高官も視察に来ました。彼らの視察は、松田竹太郎海軍造機少将を除いてはきわめて高圧的で、やたらに「尽忠報国」「技術報国」を強調するものだった。また視察が夕刻近くに終わる場合、接待を準備するのが通例だった。私はとにかく忍耐して対応し、彼らに技能工養成の現状と課題を力説しました。

だからだと思うのです。警視庁も東京憲兵隊も私を逮捕しようと思えば、前歴がありましたから適当な理由でできたでしょう。けれども私は収獄されることはなかった。軍部の高官や技術将校が視察に訪れ、督励を重ねるなかで、特高も憲兵隊も私に手を出し得なかったのではないだろうか。

校友会誌「アークの光」

——（原）挨拶がおくれました。私は1942年東京帝大の第一工学部造兵学科に入学し、先ほど話にでました仲威雄先生や木原博先生の講義を受け、研究室にも出入りしていました。

私は東大を定年で退官したのち、技術教育や近代日本における技能者養成システムの研究に関心が移りました。未開拓の領域だったからです。本日は、大原社研の吉田健二先生が岩田さんから聞き取りをされていることを耳にしまして、是非にとご一緒させてもらった次第です。

岩田 電気溶接学校における各年度の授業表や、電気溶接授業体系を図表化した大判のポスター（3枚組）も残っています。もう捨てようかと思っていたが、残しておいてよかったです。

また学校では1936年以来、校友会誌「アークの光」（季刊）を発行していました。創立の理念、溶接理論、技術の応用、卒業生の就職先一覧、校友の活躍などを紹介し、その中に私はさりげなく評論記事——戦局の分析や工場産報に対する対応などを盛り込んでいました。

「アークの光」はたんに校友会誌というより、電気溶接に関する技術・情報雑誌であり、ある意味で政治的な意図を込めた偽装雑誌だったのです。私は雑誌を通じて生徒や卒業生に、科学精神や技術の普遍性、自主・自立と進歩性をもって生きるべきことをさりげなく盛り込んでいました。本日はバックナンバーをそろえておきましたので、あとでご覧になってください。

溶接学会で報告

岩田 日中戦争が始まった1937（昭和12）年、私は日本溶接協会の第9回学術大会で、電気溶接技術の応用や溶接授業体系について報告しました。当時、溶接の研究者・技師でない者が学会で報告するということが注目され、取材

を受けました。

学術発表会では芝浦製作所のタービン技術者で、戦後に東芝の社長や経団連の会長をされた土光敏夫氏も報告しました。懇親会の席上、土光さんが私のテーブルに来て「有意義な報告でした。芝浦製作所の技能工養成に応用したいので、ご指導を賜りたい」と言われ、私はたいへん恐縮した。

——（原）日中戦争を機に、日本において技術革新の時代が到来しました。学界も企業も、旋盤技術や溶接技術の研究が盛んとなり、ドイツやソ連の先進技術の研究も進みました。岩田さんの電気溶接学校はこの技術革新の時代にマッチした、いや2、3年先をゆく技術教育の試みだったと思いますね。

岩田 私は学会で、日本における金属溶接の歴史と技術の変遷を顧みて、新興技術としての電気溶接の革新性を主張しました。あわせて金属溶接をベースにした生産工場体系の確立、アーク光の事故防止策、また溶接工の養成においては国や公的機関が担うべきことを提言しました。

左翼青年の入学

岩田 電気溶接学校で学ぶ者に、インテリと思われる青年や左翼青年が少なからずおりました。彼らは自らの経歴や素性を隠して入学し、溶接技術を修めて新しい職場へ転身を図っていた。もちろんその意図は非合法活動の継続や、自らにおける左翼活動の経歴を消し去ることにあったでしょう。

こうした左翼青年は、入学時に提出する履歴書に書かれていないが、高学歴者で、なかには帝大を卒業した人が何人もいました。とくに記憶に残っているのは長谷川博や保坂浩明＝金秉吉です。

長谷川博は京都帝大で河上博士に師事し、在

学中に日本共産党に入り、卒業後は谷口善太郎と活動を共にしていた。彼は1928年の3・15事件の被告です。釈放後は全協の調査部員や「赤旗（セッキ）」の編集員を務めた。

長谷川はなにか切迫した事情にあって私の電気溶接学校に入学した。1934年の9月のことです。彼が現場労働者でないことは、風貌や手と腕を見ればわかります。彼は溶接理論やインゴット技術を修め、溶接工としてふたたび地下に潜った。

なお、長谷川博は合法再建時に日本共産党本部の一員でした。当時、中央委員で事務部門の責任者だった幹部に黒木重徳がいます。黒木は、同じ京都帝大の先輩で、入党にさいしても紹介者だった長谷川に助力を求め、事務長補佐のような肩書きで本部に招いたのです。長谷川は1946年の4月か5月、研究に専念したいと言って辞めました。

——長谷川博さんは法政大学の教授をされた方ですね。

岩田 そうです。1946年3月に盟友の黒木が急死したのを機に、研究者を志したようです。

思い出しました。食糧メーデーの直前に、だから1946年5月中旬のことです。私は用事があって世田谷区世田谷5丁目の細川嘉六先生の自宅を訪ね、呼び鈴を押したら長谷川博が出てきました。彼は細川先生と2人で、大正7（1918）年の米騒動に関する資料整理や文献カードをつくっていた。

保坂浩明も溶接学校の卒業生です。彼は履歴書では「松山」姓で、学歴は朝鮮・平壤中卒とだけ書いていた。けれども実際は、彼は天下の秀才が集う第一高等学校を卒業し、東京帝大の経済学部に進んだエリートだった。

保坂浩明は東京帝大を卒業していない。卒業寸前に、長谷川浩ら共産党を再建するグループ

に参加して検挙された。保坂は3、4年入獄し、釈放となったのち1942年か43年の年明けに私の学校に入学した。保坂も溶接技術を得て、転身を図ろうとした。

保坂は占領期の日本共産党において、例を見ないアジテーターとして知られています。けれども占領期の一時期、党における同じ中央委員候補として接触したかぎりの印象では、彼は冷静沉着で、知的で、理詰めで思考する人だった。だから戦争末期、彼が経営する溶接棒の工場も成功したのでしょう。

左翼の隠れ蓑

岩田 1929年4・16事件の被告だった種村健も、前歴あるいは身を隠すため入学しました。日本共産党が壊滅し、中央との連絡が途絶し、また戦争が長期化するなかで彼らは彼らなりに戦時における党活動を構想したのです。

日本共産党において、佐野・鍋山の「転向声明」以降、頑張っても仕方ないとか、むしろ早く上申書＝転向書を書いて出獄し、新しい局面ないし合法舞台で活動したほうがよい、という主張もなされていた。東京市委員会もある時点で、偽装転向を認める指示を出した。これは事実ですよ。調べてみてください。だから「大量転向」の現象がおきたのです。

電気溶接という先進技術を学んで就職するという目的、これが基本線です。けれども入学者のなかには偽装転向者もおりました。また種村健のように呉海軍工廠に潜りたいとか、財閥系の軍需工場に活動の拠点を築こう、という意図をもって入学した人も少なからずいました。

—— 岩田さんの電気溶接学校は左翼の隠れ蓑、あるいは新しい活動領域を求めて転身する拠点ないし通過点になっていたということでしょうか。

岩田 実態としてそうした要素もあったと思

います。転向しなければ釈放されない、刑期の短縮がないという状況のもとで、表向きは転向して、次の舞台において新しい活動を試みようと考えた人は確かにおりました。こうした意図や行動は認めなければならない。

もちろん転向したからといって、特高刑事の監視が止むわけじゃない。けれども技術・技能を修め「産業戦士」として国策協力を装うならば、活動の領域はむしろ広がります。

——（原）技術運動ないし技術サークルの形態を採れば合法性が保たれ、生計も立ち、活動も継続できると？

岩田 そうです。そうした思惑や判断はとうぜん立ちます。技術の修得にイデオロギー性などありませんよ。溶接理論や技術を学ぶことが治安維持法に違反するわけがない。技術を修め、技術をもって就職をめざす——これは国策上、むしろ望ましい。

他方で、私にとりましては重大な懸念がありました。もし左翼前歴者の入学者が目立つならば、学校は当局に警戒されます。実際、教室の黒板や柱、器材倉庫の扉に「日本共産党萬歳！」「戦争反対！」といった標語を白墨やクレヨンで書き記し、また小刀などで彫っていることがありました。

もしかしたら特高刑事が生徒を装って教室に潜っているかもしれない。だから私は1日に何回も校内を巡回し、反戦や厭戦の落書を消していた。私はカリキュラムの改革よりはむしろ、このことの対処のほうに神経を使いました。

京浜グループ

—— 日中・太平洋戦争期、京浜地区において日本共産党の再建を意識したいくつかのグループが結成されました。酒井定吉、山代吉宗、春日正一らのグループや、中西篤・三洋兄弟、中島武彦、大窪満らの事例が知られています。

重視し、評価したいのは中西兄弟らのグループだと思います。官憲はこれを「京浜共産主義グループ」（『特高月報』昭和13年9月分、12頁）と命名し、内務省警保局編『社会運動の状況 11』（昭和14年版）も「其の勢力は本グループ結成後僅々二ヶ月を出でずして影響下を合して約百名を算し且更に漸次発展拡大の趨勢にありたり」（23頁）と記録し、その活動を警戒していました。

1937年2月に結成された中西兄弟らのグループについて、先年、中西三洋氏が「戦時下の非合法活動——京浜グループ事件」（『歴史評論』第269号、1972年11月）において活動の一端を紹介しています。

岩田 私はクートベ（1921年、ソ連共産党がモスクワに設立した東洋勤労者共産主義大学のこと——编者注）に学んだ酒井定吉らの活動も、中西篤・三洋兄弟らの活動もほとんど知らないのです。私自身、そうしたグループとは接触していない。

電気溶接学校を経営中、その昔、京浜合同労組や全協で私の指導を受けたという人が何人も訪ねて来ました。資金カンパ、寄宿舎の利用、寸借、就職依頼などを名目にしていました。これがあぶないのです。特高刑事か、回し者かもしれない。

私は要視察の対象者です。検挙されたばあい、拷問を受けて自白や転向を強いられます。だから共産主義者は常に警戒心を高め、生活を律し、検挙されないよう細心の注意を払わなければならない。私は彼らに「記憶がない」「事務員なのでなにも協力できない」と言い、麦茶すら出さなかった。

—— 付け入るすきを与えないと？

岩田 そうです。私は学校経営を弟の名義にし、表向きは校務主任＝事務員だった。通勤以外は外出も控えていたのです。

中西兄弟らの京浜グループについて、私がその存在を知ったのは1945年11月のことです。中西功が1945年10月に出獄し、竣工したばかりの日本共産党本部に入党書類をもってやって来た。

1945年10月10日、中西は豊多摩刑務所（東京・中野）を出獄した。徳田球一ら「府中組」も出獄し、2人はこの日、米第8軍の諜報機関が旧中野憲兵分隊の兵舎でおこなわれた尋問で顔を合わせていますね。2人は日本革命の戦略・戦術について話し合ったそうだが、意見が合わなかったらしい。

中西功は死の淵から生還した「英雄」であったが、入党がすぐに認められなかった。業を煮やした中西は1945年11月のある日、入党に関する書類を一式そろえて、勇んで手続に来た。入党事務係だった私が対応しました。

中西は入党にあたって、上海時代以来の活動を記した10枚ほどの手書きの文書を持参した。中西はその活動歴の一つに、京浜グループに対する助言・指導をあげていた。私自身、初めて知る事実だった。

—— 中西功さんはゾルゲ事件の被告の一人ですね。

岩田 そうです。中西は満鉄調査部に在職中、尾崎秀実との接触や、中国共産党員だった事実が発覚して検挙され、死刑が求刑された。中西は戦争が終わった1945年9月に控訴審で無期に減刑され、その2週間後にGHQの指令により出獄した。

中西に、獄中書簡集『死の壁の中から——妻への手紙』（岩波新書、1971年）があります。本人がかなり売れたと自慢していた。彼に革命の戦略・戦術に対する独自の考えがあり、独特なクセもあって、徳田とは意見が合わなかった。だから中西の入党は遅れて1946年6月となった。

戦時抵抗のあり方

—— 私は京浜グループ中、中西兄弟らの活動を戦時抵抗における一つのモデルとして評価したいのです。第1に、彼らは合法性を重視し、合法舞台における活動を基本にしていました。ここに全協時代に顕著だった、争議激発主義、街頭主義、英雄主義などはありません。

官憲も、彼らの活動や方針転換について「当面の任務として従来の極左的偏向を是正し、国策の線に副ひたる活動をも採用したる運動を展開し、この間自らのグループを拡大強化し、その勢力を基礎として党の再建乃至は党の拡大強化を計らんと為しつゝあり」（『社会運動の状況 11』21頁）と見ていました。

岩田 満州事変以降、われわれの陣営は活動領域を狭められ、合法舞台でしか存在できなかつた。やはりわれわれは彼我の力関係を冷徹に考察して、陣形を立て直す必要があつたのです。

私は先に三菱航空機名古屋製作所の争議について話しました。たたかい方によっては三菱財閥の中核企業、日本で最大の軍需工場との争議に勝つこともできるのです。跳ねればよい、というものではない。

—— 第2に、このことは岩田さんのいまの話に通じますが、中西兄弟を中心とするグループは、地域や工場ごとに最適の活動方針を立てていました。彼らは、工場単位に労働者の状態や工場産報の実態を調査していました。思考も行動も理詰めなのです。また地域における活動と指導の拠点を、東京では蒲田と新宿に、神奈川県では川崎市に設けていました（『社会運動の状況 11』24～25頁）。

戦争末期の1943、4年の時点で、京浜地方において活動をつづけていたのは中西兄弟らのグループのみだったようです。グループは1944年1月に第2次検挙をもって壊滅します

が、メンバーは1938年3月時点で300余名でした。

岩田 7年余も活動をつづけていたとはすごいですね。

—— 先年（1980年4月14日）、私どもの研究所は、日本共産党の幹部だった春日正一さんから産別会議の結成の経緯について話を聞きました（法政大学大原社会問題研究所編『証言産別会議の誕生』総合労働研究所、1996年に収録——編者注）。

私は酒井定吉さんらのグループの実態についても知りたいと思い、後日、春日さんから聞き取りをしました。春日さんによれば、グループは40人ほどで、盟約を結ぶなど確かなものでなく、党員やシンパとの連絡が主であり、これぞという争議や産報の活動を指導したという例は無いとのことでした。グループも1940（昭和15）年5月の一斉検挙で霧散したそうです。

京浜グループ——知識人との連帯を志向

—— 第3に、中西兄弟らのグループは知識人との連帯を志向していました。彼らは知識人と意思疎通を重ね、自らの活動方針を立て、検証し、問題点や課題を確認していたようです。

この点、中西三洋さんが先の「戦時下の非合法活動——京浜グループ事件」で、知識人との連帯を求めた理由について実践上「もっと深く理論的に研究する必要があるため」（84頁）とし、官憲も「メンバー相互の理論的水準の高度化」（『社会運動の状況 11』22頁）を図っていたと述べています。

知識人がどのような思いで京浜グループに協力をしたのか——中西篤さんが先日、古在由重先生のことを述懐しています（「古在由重氏と『京浜労働者グループ』の関係」、編集委員会編『古在由重 人・行動・思想』同時代社、1991年）。

岩田 中西功や古在さんのほか、協力者がいたのですか。

—— 昭和研究会のメンバーだった松本慎一や、企画院属で調査官の芝寛（しば・ひろし）らが協力していました（『社会運動の状況 11』23頁）。1938年の企画院事件の発端は芝寛の検挙だったようですね。

岩田 いや、私は知らない。

—— 中西三洋さんによれば、岩村三千夫氏や浅川謙次氏も支援者で、学習会のチューターを務めていたそうです（前出「戦時下の非合法活動——京浜グループ事件」81頁）。2人は検挙され、岩村さんは釈放ののち「読売」に入り、1945年10月の第1次読売争議のときは論説委員でした。

岩村さんも浅川さんも中国問題の研究者です。たぶん2人は中西功に頼まれるかして協力していたのではないのでしょうか。

松本慎一と尾崎秀実

—— 古在由重も三木清も唯物論研究会のメンバーでした。また松本慎一や尾崎秀実も昭和研究会のメンバーで、2人は第一高等学校、東京帝大（法）の同期で無二の親友だったようです。

尾崎秀実が「朝日」を退職し、近衛内閣の囑託も辞して満鉄調査部に移籍したのは1939（昭和14）年のことのようにです。たぶん中西功が新京の満鉄本社で、もしくは東京支社において尾崎と会い、彼に京浜グループに対する指導・助言を求め、尾崎がこれを盟友の松本慎一に頼んだ、という経過だったと思います。

——（原）私は松本慎一さんをよく知っています。私は新制の東京大学に奉職する以前、機械製作資料社という出版社に勤め、推されて全日本印刷出版労組（産別会議系、1946年4月7日結成——编者注）の役員を務めました。

松本さんは初代の書記長です。

松本さんは産別会議の幹事でした。ほかにも団体役員や、尾崎秀実が獄中から妻子に宛てた書簡集『愛情はふる星のごとく——獄中通信』（世界評論社、1946年）の編集などで多忙をきわめ、1947年11月26日に急死しました。松本さんは、尾崎がゾルゲ事件で処刑されたあと尾崎家に寄り添っていました。

松本さんの死後、印刷出版労組の書記長は、当時『世界』（岩波書店）の編集長だった吉野源三郎さんが引き受けました。吉野さんも尾崎とは東京帝大の同期で、無二の親友でした。

京浜グループの主体

——（原）先ほど東京府の機械工養成所のこと話が話に出ましたね。私は3か月ほど前（1991年6月25日）、東京郊外の西多摩郡日の出町に中西篤さんを訪ね、機械工養成所時代のことや、養成システムについて話を聞いて来ました。

岩田 中西篤とはもう何年もあっていない。私は1945～47年中、日本共産党の東京地方委員会の委員として、彼や弟の三洋と連絡を取り合っていました。中西篤は長兄の中西功と同じく理論肌で、また筋を通すコミュニストでした。彼は徳田や野坂にもなびかなかった。

中西篤に、主流派を批判した『日本共産党内の偏向について——野坂・徳田コース批判』（高田書店、1950年）があります。あの当時、徳田や野坂を批判することはとても勇気がいることです。中西篤は骨太の党员でした。なお中西三洋はのちに千代田区委員会の委員長になっていますよ。

——（原）話を戻しますね。京浜グループは、東京府機械工養成所の1935～36年次に修了した1期生と2期生20名余が指導部を固め、メンバー中、過半が機械工養成所の修了生だっ

たそうです。

また中西篤さんによれば、これはテープに入っているかどうかまだ確認していないけれども、活動においては転向者の入会を拒み、全協に関係した職業オルグの指導も排除していたそうです。

岩田 当時なら、そうした配慮をなすのは当然です。賢明な判断・措置だったと思いますね。とにかく特高刑事の執念はすごかった。一度でも治安維持法違反の容疑で検挙された場合、特高は転向の有無に関係なく追跡していたのです。

——（原）東京府機械工養成所は、国策課題を担って設立されました。入所生は6か月間、基礎理論と技術を学びました。たぶん彼らは勉強中に、時代にどう向き合うべきか話しあったのでしょう。京浜グループのメンバーは、ほとんどが機械工養成所の卒業生か、彼らが信頼した仲間だったそうです。

また中西篤さんによれば、京浜グループのメンバーは1944年に組織自体は消滅したものの、

1945年8月15日の敗戦以降は、日本鋼管の鶴見製鉄所、横浜船渠、石井鉄工所、東芝堀川町工場、日本起重機、明電舎などの組合の結成を中心となって担い、争議の最前線に立ったそうです。

—— 中西篤氏のテープを聞くことはできますか。

——（原）中西さんに相談してみます。私自身、聞き直してメモを取り、もし中西さんの了解を得られたならテープは大原社研に寄贈することにしましょう。ほかに黒滝チカラさんなどから聞いたテープもあります。私も相応な年齢です。歴史証言の私蔵あるいは死蔵は避けたい。みなさんに有効に活用してもらいたいと思います。

—— 本日は長時間にわたってのお話、有難うございました。原正敏先生にもご参加頂きまして有意義なヒアリングとなりました。次回は来年（1992年）3月に、政治犯釈放のテーマでお話をお願いいたします。

岩田 承知しました。（つづく）